兵庫生物 12 (4)：210－217，2003〈報告〉

パプアニューギニアの山旅から
野生と文明の狭間で

大 賀 二 郎＊

The nature and culture of Papua New Guinea

Jiro OGA

はじめに

2002年4月20日，成田とパプアニューギニア国の首都ポートモレスビーを結ぶ空路が開設された。エアーニューギニの定期直通便である。これまで日本から同国へは香港か，シンガポールまで行って，そこからの乗り継ぎ便を利用するより方法がなかった。直通便は今のところ週一便であるが，太平洋の秘境の真っ只中へ6時間半で結ばれた。

ニューギニア島は総面積789,000km^2。アジアとオーストラリアを結ぶ立地にある。東経141度線を境に西半分はインドネシア領イリアンジャヤ。東半分がパプアニューギニアで，英国連邦に属する独立国で，今回取り上げたのは後者である。面積461,700km^{2}人口400万人である。本島以外に600の島々や環礁からなっている。

私は幸いにも開設第一便で入国することになった。当日成田空港では盛大な就航祝賀会が催された。目も覚めるばかりに飾られた原住民の踊りも被露された。ただならぬ熱帯のムードで沸き返った。経済的にも文化的にも残された最後の空白地帯に対する斯界の期待が大きい。

私たちは成田を深夜22時に出発。ニューギニアの玄関ポートモレスビーには朝6時に着いた。空港で簡単な入国審査。直ぐ近くのエアーウエイズホテルで簡単な朝食。眺望絶佳な二階ロビーから壮大な熱帯の朝焼けを眺める。

ここを起点にハイランド地方のロゴカ，ラエそしてニューブリテン島に飛び，ラバウル周辺を廻る。期間は2002年4月20日から27日まで，とてもゆっくりと観察できる期間ではないので，カメラによるポイントアウトとこの国の自然や民族の現況を感覚的に触れるにとどまった。後は現地の動植物園・博物館の館員の説明や文献によってまとめた。なお，生物の日本名の一部には，従来から邦人の間で呼ばれていたものもある。

行程概説

見学や調査の行程は，つぎのとおりである。ポートモレスビー周辺では，国立博物館，聖霊の家を模した国会議事堂，この地方の野菜・果物を扱う広大なマーケットなど。国立博物館は，自然，生物，民族，芸術などの分野ごとに展示され，パプアニューギニアの概念を把握できる。

ゴロカはハイランド地方東部の中核の街である。茂った高木の密林に囲まれている。バード オブ パラダイスホテルの園内は野生木がそのまま生かされている。樹幹にはランやシダ類が着生しており，さながら植物園のなかのホテルのようであった。車でマウントキス展望台に上がると，新しく建設されつつあるカラフルな街が望見できる。また中腹の林相もよくわかる。途中ザハビカス自然公園近くの部族集落に立ち寄る。最初は警戒されたが，話がつくとほぼ全員が出てきて歓待された。男は一見狂暴な顔付きであるが，意外に静かで純朴である。生まれたときから外部との接触がないと，子供のような心が保たれるのかも知れない。

J.K. マッカシー博物館は個人経営。土俗の民族資料によって風俗習慣を紹介する。展示物に極楽鳥の剥製や第二次戦争の双方の武器などもあった。

ゴロカ市内から，中型車でマウントハーゲンに抜け山岳ハイウエーを走り，ダウロ峠（2478m）に出る。ウイルヘルム山の直下にあり，絶えず霧が山腹を這っている。シイノキ，ブラシノキ，フカノキ，バナナなどの密生があり，頂上近くになると，木生シダ，シャクナゲが見えてくる。

峠で折り返し，急峻な谷へ下ると，マッドマスクの奇祭で有名なアサロ族の集落がある。私たちはここで世にも不気味な踊りを見学し，その後，これも不気味なムームーと呼ぶ野生料理をご馳走になった。地中で肉，野菜，芋などをバナナの葉でくるんで蒸し焼きにしたものである。

レイはソロモン海の要衝に開けた街である。戦時中絶壁上のハナマンの丘には日本軍の監視所があった。岩壁には多くの洞窟がある。レイには熱帯降雨林動植物園がある。自然雨林を生かし，最大規模の植物園として整備されている。管理は白人が当たっている。ここはランのコレクションで有名である。この国特有の動物も見られ

＊森羅万象の館　博物館学芸員

る。キノボリカンガルー，クスクス，マウンテンワラビーなど。それに巨大なイリエワニもいる。鳥類は大きなドーム状禽舎のなかを自由に飛び廻っている。入館者もこの禽舎のなかを回遊する。ゴクラクチョウの雌雄もいる。その雌は非常に人なれしていて，肩や頭に停まる。なおこの動植物園は上野動物園と親交がある。

レイ空港からラバウル空港までの大型ジェット機の飛行は初めてのことで一悶着，結局はホスキンス空港を経由してラバウル空港に着陸した。ここはニューブリテン島北部の要衝で，戦時中，日本連合艦隊司令部があり，零戦などが発着する最前線基地であった。1994年9月，対岸のマチュウピト火山の爆発で，旧日本軍の造営した東飛行場は壊滅した。現在は一望千里の灰の海になっている。火山は今も，活発に噴煙を上げて活動中で，付近の海中では間欠泉が沸き立っている。ラバウル市はかってはドイツが開発した風光明媚な山腹に開けた街で，前方に火山の噴煙が眺められる。山頂に地震研究所がり，日本人が技術指導している。

激戦地ラバウル周辺には司令部跡，小牧桟橋，サブマリンベース，マルマンマン展望台，図南嶺，日本陸軍司令部，大発格納庫，ココボ戦争博物館などが戦争遺跡として残っている。また，飛行場近くのジャングル内は零戦，九七式重爆撃機の残骸があって土に帰りつつある。操縦室にはタデ，イラクサなどが生い茂り，朽ちた金属にはマメツタや地衣類が付着していた。

ニューブリテン島の植物は，ヤシ・バナナなどが多く，高木にはマメズタやサルオガセが付着していた。林床にはサトイモ科やシダ植物が覆っている。海岸の一部にタコノキの群落があった。旧日本軍の洞窟にはアナツバメやコウモリの住み着いているところがある。このあたりには猛毒マムシコブラがいたり，ウミヘビが陸に上がっていたりして 危険。ムチサソリもいるが，これは悪臭を出すだけで無毒である（ロイ 1980）。

岩礁ばかりでなく，美しい砂浜もある。アジサシ，ミズナギドリがいて平和そのものである。しかし，ここで泳ぐことは差し控えなさいと言う。サメが出るからでなく，原住民が出てきて危険だと言う。

雲霧のハイランドと火山島礁の動植物

パプアニューギニア本島の中央部には，高峻な中央，ビスマーク，そしてオーエンスタンレーの各山脈が走り，背梁山脈を形成している。最高峰ウイルヘルム山は海抜4,500m。山脈の南には，セビク川，フライ川があって，多量の降雨を海に運んでいる。その流域には湖が形成され，雲霧に包まれた鬱蒼とした熱帯降雨林になっている。本島の北の海岸は急峻な絶壁が多く，海域は珊瑚礁や火山活動によってできた島礁が数多く存在する。

植物分布と特異な種類

パプアニューギニアの植物分布は，南帯オーストラリア植物区系に属し，熱帯多雨林である。赤道近くに位置し，高峻な背梁山脈の影響もあって，沿岸低地の湿潤な熱帯，山岳中腹の冷涼な温帯そして高山性の寒帯に至るまでいくつかの気候帯が見られる。それぞれ気候帯によって，固有の植生が分布する。繁茂した多雨林，タコノキ，マングローブなどの沼沢，サバンナ林，疎性草地，シイ，サガリバナ，ナンキョクブナの森林などが存在する（ロイ 1980）。

多雨林の樹幹には，ラン科，パイナップル科，アカネ科，シダ類，サルオガセなどの蘚苔類などが着生し，また，アカネ，センニンソウなどの蔓が絡んで太陽光線を遮っている。林床にはシダ類，サトイモ科，蘚苔類などで足の踏み場もない。まさに鬼気迫る独特の景観を形成している。多様な環境から植物密度が高く，形態や生態に特異な進化がみられ，固有種も多い。

パプアニューギニアの顕花植物は，12,000種が記録されており，そのうち2,500種はラン科である。隠花植物は記録がない。現在も新種が続々と発見されている。新種であっても気がつかない場合も多いのではないか。つぎのような特異な種が知られている。

ニューメンラン（巨大種），シランモドキ，サクランボラン，ウツボカズラsp.（小形地上性），ゾウコンニャク，パプアソテツなど（林 1986；ロイ 1980）。

動物分布と特異な種類

パプアニューギニアの動物区系はオーストラリア系に属する。地質時代にこの大陸が隔絶されていたため，有袋類始め固有種や特徴のある種類が独自に進化した。また，ネコ・イヌ科の肉食獣がいなかったので，当時の種類がそのまま保存された。サルなどの霊長類は，これだけの森林や食物が豊かでありながら，存在しないのは不思議である。

この区系は先に述べたように複雑な地形や気候帯が分布しているので，動物の種類も密度も際立って高い。特殊な環境の中で適応進化し，昆虫類に至っては，擬態，保護色などによって，想像もできないような形態や色彩のものが見られる。また，その習性や生態に驚くべきものがある。

パプアニューギニアの動物の種類は，哺乳類130種，うちコウモリ70種，齧歯類56種，単孔類2種。周辺海域ではイルカ・クジラ類12種。別にジュゴンの存在が知られている。爬虫類・両生類は未確認のことが多いのか記録がない。魚類は淡水・近海のもので1,000種。節足動物は記載がないが，クモ類だけでも3,000種が知られている。ク

モ類は特にこの地で適応進化しており，巨大な網を張るもの，共同で張るもの，網を投げるもの，ランに擬態するものなど珍しい習性が見られる。

次のような固有種や特異な種が知られている。

キノボリカンガルー，フーテンワラビー，クスクス，プラニゲイル（有袋ネズミ），フクロモモンガ，ツキノワポッサム，ナガハシハリモグラ，ゴクラクチョウ（フウチョウ），ヒクイドリ，カンムリバト，ウミワシ，オジロヨタカ，シロガシラトビ，オーストラリアアオバズク，ススイロメンフクロウ，オオハナインコ，ハンデークート，ハチクイ，セカセカヒタキ，ヘラサギ，アジサシ，イリエワニ，ニューギニアワニ，アメジストニシキヘビ，カーペットニシキヘビ，タイパン，オーストラリアクロムチヘビ，ニューギニアアシナシトカゲ，ヘビメトカゲ，オオトカゲ，オセアニアヤモリ，ニューギニアカミツキガメ，テッポウウオ，テラピア，アレキサンドリトリバネアゲハ，ベニカザリシロチョウ，ベックレスサン，シャコモドキナナフシ，パプアキンイロコガネ，ムチサソリ，ハナグモ，ハエトリグモ，トリトリグモ，オオジョロウグモ，ナゲナワグモ，コケアシグモ，トゲグモ(Vinsent 2002)。

秘められた部族社会

原住民の大部分は，肥沃なハイランド地方に定住しているが，複雑な地形の森林，渓谷，川，山脈によって互いに分断され，交流のないまま原始的な生活をしている。いわゆる森の民である。

人種は，背の低いネグリート系，中身長で体毛の多いパプア系，そして高身，広鼻，ちじれ毛のメラネシア系などで，500の部族社会があるという。言語は，ニューギニア内陸部とニューブリテン島の語系に大別されるが，なお細かくは700の言語があるという。

パプアニューギニアの公用語は英語であり，キリスト教が布教されており，街では英語が使われている。土俗語と英語が混合してニューギニアイングリシュと呼ぶ新しい英語ができつつある。食生活は，根菜農耕文化圏とも呼ぶ自給自足体制が伝統的にできている。食資源は，タロイモ，ヤムイモ，サツマイモ，バナナ，パンノキ，サゴヤシ，キャッサバ，タオピカ，ココナツミルクなどで，蛋白資源は豚，鶏，犬などの家畜。ワラビー，クスクス，イノシシ，ワニ，昆虫なども捕らえて食べる。

社会構成は，各家族の集合社会である。ビグマンと呼ぶ酋長格のリーダーがいて，各家族が統制される。ビグマンは世襲制ではない。力と意見をまとめる才覚のある者が選任される。通貨は存在しないが，物々交換は行なわれている。土地，家屋，家畜，日用品などには慣習的所有権がある。相互扶助の精神は隅々まで徹底している。各部族社会はそれぞれ独立して存在する。お互いに不可侵の精神がある。しかし，部族を異にする個人間の争いが部族全体に発展する場合がある。連帯してことにあたる習慣があるからである。

部族間の戦争や紛争に関しては，ペイバックと呼ぶ掟がある。加害部族に対する被害部族の報復行為である。中近東におけるかつての目には目をの律法に似ている。しかし，報復は被害を受けた範囲に限定される。戦いが無限に拡大することをお互いに防ぐためである。敵の首級は昔は酋長の家に安置されていたが，今はキリスト宗主国の強い指示で禁止された。竹槍，弓矢，骨刀，石斧などの武器は使われることはないが常備されている（梅棹 1976)。

かつてこの地方の原住民は首狩族として恐れられていた時期がある。事実，探険に入って消息を絶った例がいくつかある。彼らには秘められた聖域がある。また，伝承されてきた掟や慣習によって行動する。それに抵触すると不幸なことになりかねない。集団行動に発展すると危険である。しかし，個人的には想像もできないほど実直で控えめである。おそらく閉鎖社会のなかで，いつまでも幼少の精神状態に外部から影響されることなくで育ったのであろう。おそらく，個人で行動に出ることはないと思える(梅棹 1976)。

密林のなかには，様々な祖霊，樹霊，地霊，悪霊などが棲んでいると信じられている。供え物の儀式や霊を崇める祭礼や踊りが絶えず行なわれている。これが精神母体になっていて，集会所，仮面，祖像彫刻，腕輪，鼻輪，化粧，刺青など奇抜な風俗習慣がある。その図柄などは，物憂い熱帯の雰囲気や原色の動植物が発想の原点になっている。素材もゴクラクチョウ，トリバネチョウの羽，ランの花などを用いる(梅棹 1976)。

この地方で代表的な踊りが二つある。シンシンとマッドダンスである。前者は，各部族から数十人が出る。伝統衣裳，化粧，飾りを身にまとい，踊り，唄う。後者は，アサロ族の奇祭で，異様なマッドマスクを被り，竹槍，弓矢を振り回し，鬨の声や奇声を発して踊る。神や妖怪などに変身し，忘我の境地に陥る。

なお，奇習として近年まで先祖の死者をミイラとして崇める習慣があったが禁止された。また，麻酔作用のあるペテルチューイング。肉親などを亡くしたときに指（第一関節）を落とし，悲しみを共にする習慣。鼻中隔に穴をあけ，鼻輪を通す習慣などがあるが，問題視されながら現存している。

おわりに

（野生と文明の狭間で）

地上最後の秘境といわれてきたアマゾン源流域やアン

デス高地，ナイル源流域やサワラ砂漠にも開発の波が寄せ，高層ビルまで見られるようになった。

パプアニューギニアは，広大な空白が残された最後の秘境である。しかもそこは砂漠ではなく，生物がぎっしり詰まった野生最後の砦である。

山地や密林には，先住民族が原始のままの生活をしている。食べ物も自給，裸同然で，衣類もいらない。外部との経済・文化の交流も殆どない。

国際社会は，このような非文明，非衛生をいつまでも放置できないとして，教育，技術，住宅，食料，医療，日用品などの支援を始めた。奥地からの移住の勧奨も進められている。すでに都市部に移住してきた人たちもいる。新しい土地では，全くの無知無縁で，生活基盤もなく，環境や慣習も異なる。そして直ぐに貨幣経済が適用される。いつまでも援助に頼るわけにはいかない。早いうちに自活しなければならない。ここでは近くに生えている野生バナナにも所有権がある。スーパーのような便利なものがあるが，ここではお金がいる。働くにも経験がなく，それ以前に働くところがない。

大自然の懐で，先祖の霊を信じ，緑のなかで野生と共存し，それなりに文化をつくってきた。伝統的な食料採集民族である彼らである。いきなり無縁で異質の西欧文化の中に取り入れる生活経験も能力も白紙の状態である。適応できるだろうか(大賀 2002)。

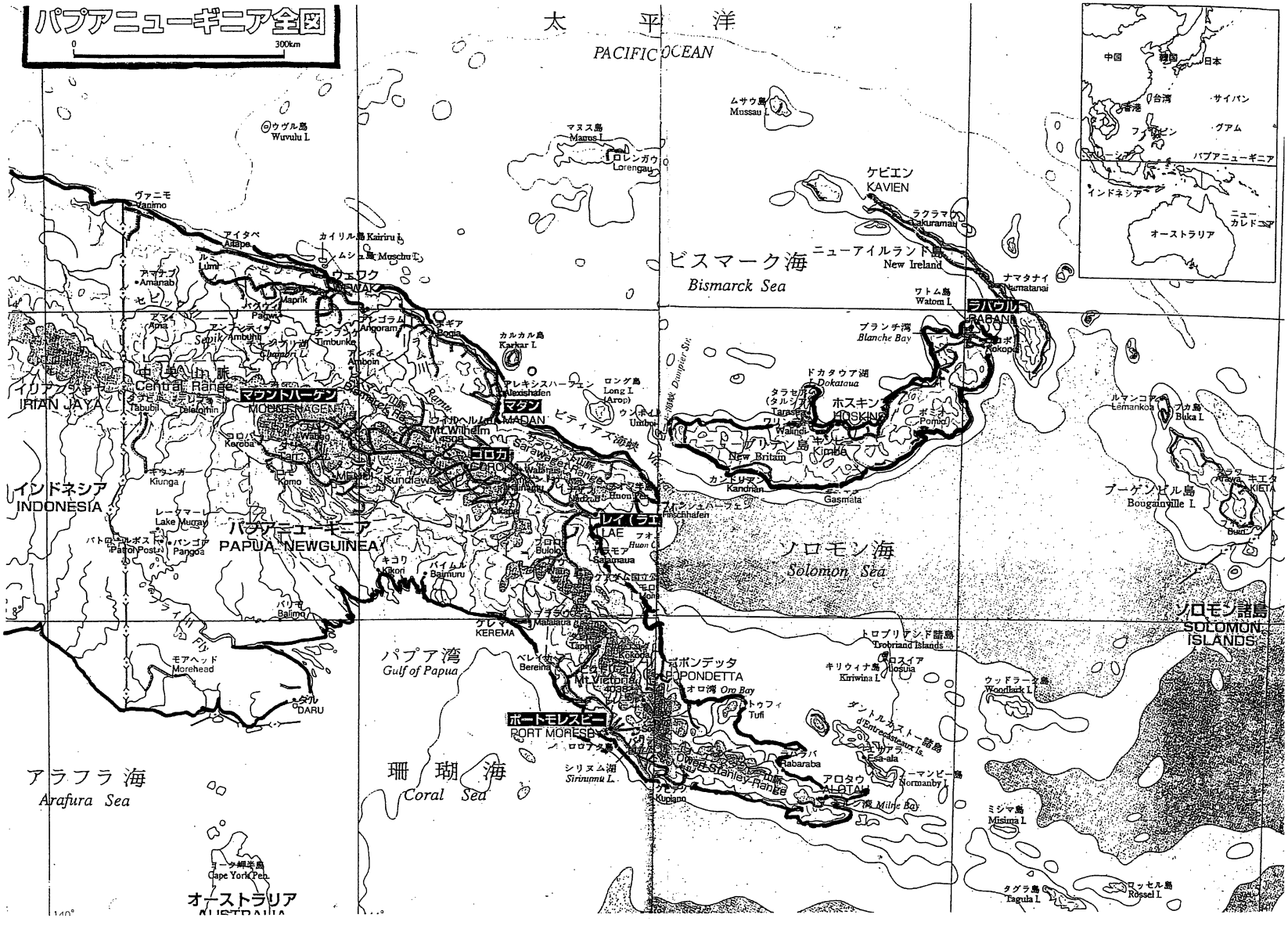
今，環境汚染がグローバルに拡散している。そして世界的な大不況の真っ只中にある。奥地の急速な開発やその人々の都市周辺部への移住作戦は問題がある。眠っている未知の病原体を呼び覚まし，他の世界に流出させるおそれや，また，逆に文明が奥地を汚染することが懸念される。将来，都市部の生活に適応できない人々の犯罪も心配される。確かに奥地での生活は蛋白資源が欠乏する。現地への補給とともに，自給自足の体制も必要となってくるだろう。

街に出るか。野に残るか。彼らは決断しなければならない。かつて人類は英知を結集して，南極の自然を原始のまま残すことに成功した。今，地上最後の生物の楽園である広大なニューギニアが問われている(大賀 2002)。

旅から帰って，ヘンリー・D・ソロー(1998)の「森の生活」を精読している。都市文明から野生への回帰が魅力的に語られている。自然との共存や清貧の生活。文明が失ったものがそこに静かに灯っている。

引用文献

林　弥　栄．1986．原色世界植物大図鑑．北隆館．
ヘンリ・D・ソロー．1998．森の生活．宝島社．
ロイ・D・マケー．1980．未踏の大自然．タイムライフ．
最後の秘境パプアニューギニア展．2002．大賀二郎・パプアニューギニア政府観光局協力．神戸アジア交流プラザ．
梅棹忠夫．1976．民族探険の旅（オセアニア）．学習研究社．
Vinsent Hon.　2002. Paradise. Air Niuginis.


パプアニューギニア全図
0
300km
太平洋
PACIFIC OCEAN
ビスマーク海
Bismarck Sea
ニューアイルランド島
New Ireland
ケビエン
KAVIEN
ラバウル
RABAUL
ホスキン
HOSKIN
ニューブリテン島
New Britain
ブーゲンビル島
Bougainville I.
ソロモン海
Solomon Sea
ソロモン諸島
SOLOMON ISLANDS
ポンデッタ
POPONDETTA
ポートモレスビー
PORT MORESBY
パプア湾
Gulf of Papua
珊瑚海
Coral Sea
アラフラ海
Arafura Sea
オーストラリア
AUSTRALIA
インドネシア
INDONESIA
イリアンジャヤ
IRIAN JAYA
パプアニューギニア
PAPUA NEWGUINEA
マウントハーゲン
MOUNT HAGEN
マダン
MADAN
ゴロカ
GOROKA
レイ
LAE
ウェワク
WEWAK
中央山脈
Central Range
ヴァニモ
Vanimo
アイタペ
Aitape
ルミ
Lumi
アマナブ
Amanab
セピック
Sepik
ムサウ島
Mussau I.
ロレンガウ
Lorengau
マヌス島
Manus I.
ウヴル島
Wuvulu I.
カイリル島
Kairiru I.
ムシュ島
Muschu I.
ワトム島
Watom I.
ナマタナイ
Namatanai
ブランチ湾
Blanche Bay
ドカタウア湾
Dokataua
ロング島
Long I. (Arop)
カルカル島
Karkar I.
アレキシスハーフェン
Alexishafen
ルマンコア
Lemankoa
ブカ島
Buka I.
ブーゲンビル島
Bougainville I.
ソロモン海
Solomon Sea
トロブリアンド諸島
Trobriand Islands
キリウィナ島
Kiriwina I.
ウッドラーク島
Woodlark I.
ミジマ島
Misima I.
ロッセル島
Rossel I.
タグラ島
Tagula I.
ヨーク岬半島
Cape York Pen.
ダル
DARU
モアヘッド
Morehead
ケレマ
KEREMA
ベレイナ
Bereina
ベイムル
Baimuru
キコリ
Kikori
バリマ
Balimo
パプア湾
Gulf of Papua
オロ湾
Oro Bay
トゥフィ
Tufi
ロスイア
Losuia
ガンタルカスト諸島
d'Entrecasteaux Is.
エガラ
Ega-ala
ラバラバ
Rabaraba
アロタウ
ALOTAU
ミルン湾
Milne Bay
ノーマンビー島
Normanby I.
クピアノ
Kupiano
シリヌムー湖
Sirinumu L.
ウェスト・スタンリー山脈
West Stanley Range
ムンディ
Mundi
ムンディ山
Mt. Victoria
4088
ポートモレスビー
PORT MORESBY
ロロタ湾
ヴァイ
Vaiv
ヴァイ
Vaiv
ブーゲンビル島
Bougainville I.
ブカ島
Buka I.
ルマンコア
Lemankoa
ラバウル
RABAUL
ホスキン
HOSKIN
ケビエン
KAVIEN
ニューアイルランド島
New Ireland
ビスマーク海
Bismarck Sea
ニューブリテン島
New Britain
ドカタウア湾
Dokataua
ブランチ湾
Blanche Bay
ワトム島
Watom I.
ナマタナイ
Namatanai
ムサウ島
Mussau I.
ロレンガウ
Lorengau
マヌス島
Manus I.
ウヴル島
Wuvulu I.
カイリル島
Kairiru I.
ムシュ島
Muschu I.
ヴァニモ
Vanimo
アイタペ
Aitape
ルミ
Lumi
アマナブ
Amanab
セピック
Sepik
ウェワク
WEWAK
マダン
MADAN
ゴロカ
GOROKA
レイ
LAE
マウントハーゲン
MOUNT HAGEN
中央山脈
Central Range
イリアンジャヤ
IRIAN JAYA
インドネシア
INDONESIA
パプアニューギニア
PAPUA NEWGUINEA
ソロモン諸島
SOLOMON ISLANDS
オーストラリア
AUSTRALIA
中国
韓国
日本
台湾
香港
サイパン
グアム
フィリピン
パプアニューギニア
インドネシア
ニューカレドニア
オーストラリア

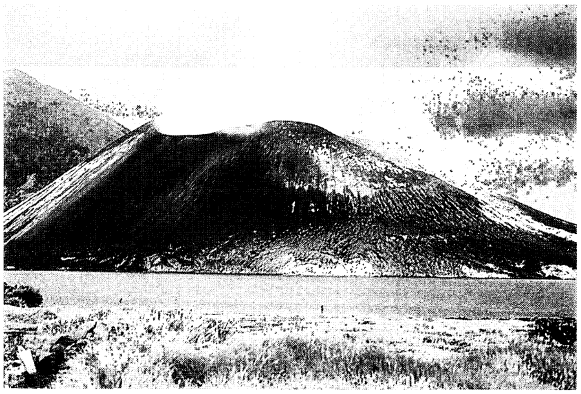


写真１　ニューブリテン島マチューピト火山

写真２　熱泉たぎる火山礁

写真３　風光明媚なラバウル市

写真４　本島ダウロ峠（2,478m）

写真５　ハイランド地方の植生

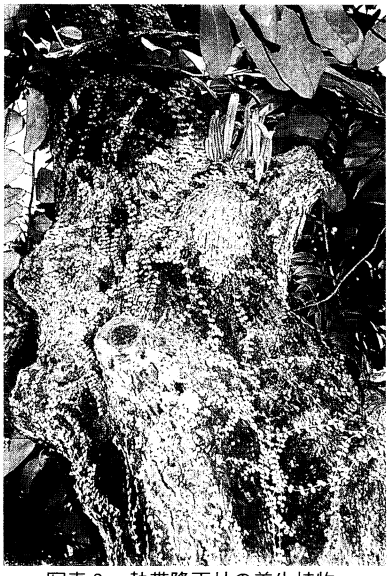


写真６　熱帯降雨林の着生植物

写真７　熱帯降雨林の地衣類

写真８　巨大な蟻塚

写真９　海岸高地の一般風景

写真10　野外料理ムームー

写真11　奇怪なマッドマン

写真12　よく慣れるアメジストニシキヘビ

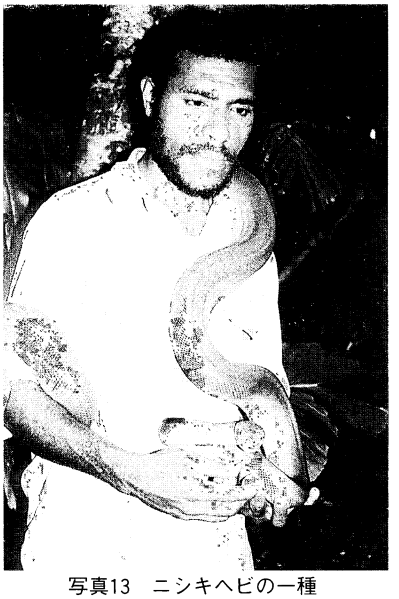


写真13　ニシキヘビの一種

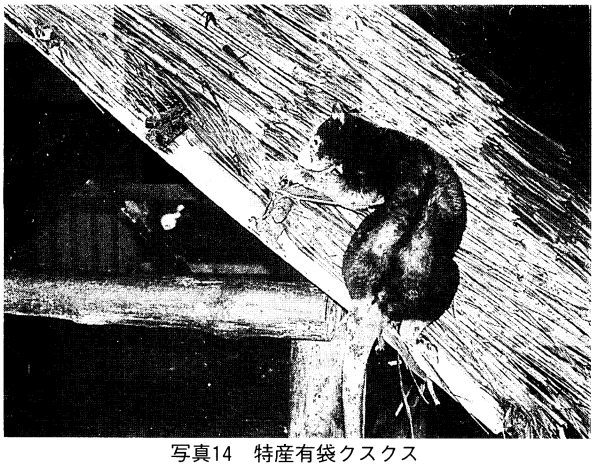


写真14　特産有袋クスクス

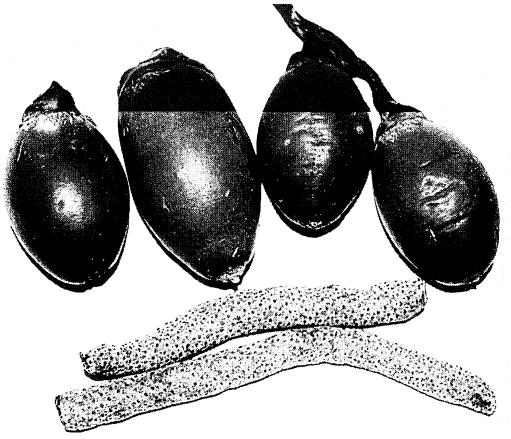


写真15　麻酔作用のあるペテルチューイングの材料

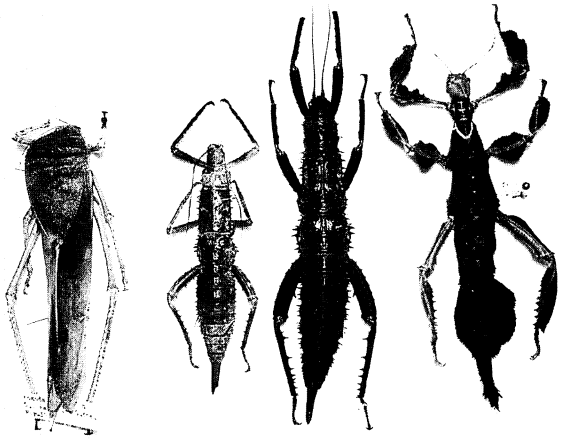


写真16　特産巨大昆虫類

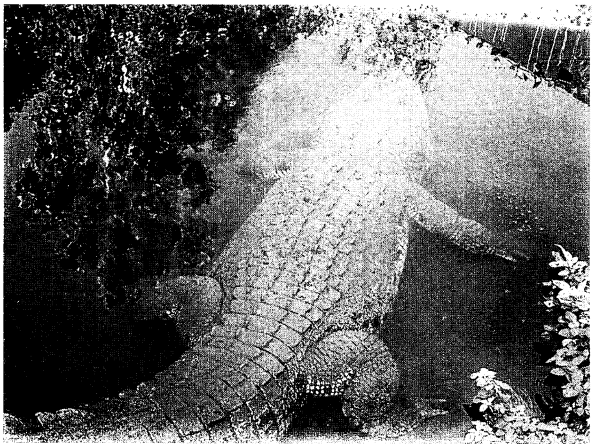


写真17　狂暴なイリエワニ

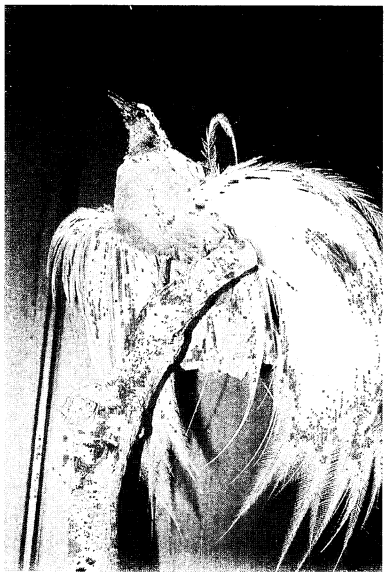


写真18　国鳥ゴクラクチョウ（標本）

写真19　ヒクイドリ

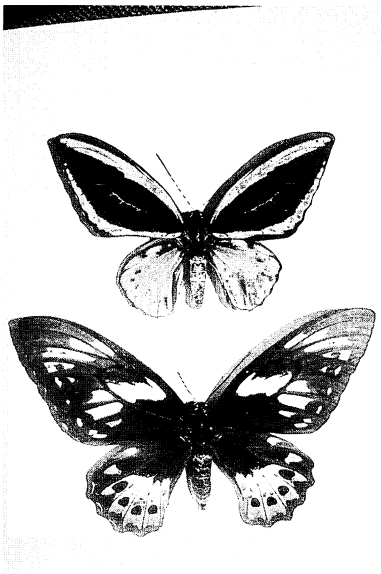


写真20　トリバネアゲハの一種

写真21　土に帰りつつある零戦

写真22　塩分補給に人の額を舐めるインコ